2024年3月15日平群桃源郷で観察した花木

作岡田弘

アオモジ（アオモジ）クスノキ科ハマビワ属　＊花期　２～3月

名前に由来＝同じ仲間のクロモジは幹が黒いのに比べ、アオモジの幹が青みを帯びているいるので、＊花言葉＝多い友人、花を多くつけることことからの由来。アオモジの種子からは精油が作られています、その香りは、レモンやレモングラスに似た香りと表現されており、とても爽やかな香りの精油で販売されており。名前は「メイチャン」「リッツェアクベバ」です。香りは、ツボミをつぶすと柑橘系の爽やかな香りがします、つぶさないと何も香りません。

・日本の固有種で特に九州西南部から西南諸島に生育しており。雌雄異株です、奈良の榛原地域に自生しているのは珍しい、花木の産地として生け花用として植栽してされていたのが放置されたのが大きくなったのでは考えられます。花は一見、黄色に見えますが、花弁は白色です、雄蕊,雌蕊が黄色ですから黄色が目立ち全体が黄色にみえるのです。

尚、アオモジは葉、木部、果実にもそれぞれ芳香があり、木部は家具や民芸品として使用されている。種子からの精油抽出率は3～5％ほどあり、そのうちの70～85％はシトラール（とは？ゲラニアールとネラールという２つの成分を表している、それぞれよく似た成分で、この２つの成分が混在しているのを「「幾何異性体」という間柄であるといいます。その「シラトール」の効能は多種にある。）です、中国では農園栽培して種子から精油を抽出しており年間産油量は５００～１５００トンに及び、石鹸、香料、香味そのものとして、又、ビタミンAやスミレを模倣した香りの原料にも用いられている。

「シトラール」の主な効能。

・鎮痙（チンケイ）抗瞳痛効果、血管拡張緩和効果、抗肥満、抗菌、抗炎症、虫の効果（シロアリ、ダニ殺虫、ノミ殺虫、蚊の忌避）、等々多岐にわたり効能がある。

サンシュユ（山茱萸)ミズキ科ミズキ属　＊花期＝3～4月

中国原産、春先に葉が出る前に黄色の花を咲かせる、秋にはグミに似た楕円形の赤い実をつける。江戸時代中期に薬用植物として渡来、**＊名前の由来**は＝サンシュユは学名のラテンゴで「角」を意味します、角は硬い材質ですからサンシュユの材質の硬いことからきています。**＊花言葉**＝多くあります、持続、耐久、気丈な愛強い愛、いずれも硬くて強い材質から由来している花言葉だと思います。

薬用として植栽されていたのですから、その効能は多くあります。柔らかい果肉の部分です、以下列記しますと、肝臓や腎臓の機能を高める、頻尿改善、ゲル止め汗や出血を止める、目の疾患、めまい、耳鳴りの改善、血圧降下の作用、滋養強壮や腎臓、肝臓機能の活性化、等々多くの薬効があります、また、果肉をジャムとして食べることができます。作り方は簡単です、実を丸のまま煮て柔らかくなったら取り出し、冷まして種を取り、実はすり潰し、砂糖とレモン汁を加えて煮込んで完成です、砂糖の量は好みで。

ハナモモ（花桃）バラ科サクラ属／スモモ属　＊花期3～4月

ハナモモは、花を観賞するために改良されたモモです、サクラの花が咲く時期に前後して咲きます。あでやかなピンクや赤、白の花をつけるものや多彩です、モモは古来より中国で災いを除き，福を招くとされていた、日本への渡来は古く弥生時代と言われている、「古事記」にもイザナギが黄泉の国から逃げ帰る時に悪鬼にモモを投げつけて退散させたとあることから、古い時代から栽培されていたと思われます、その後、平安時代には3/3の桃の節句が祝われ、モモの花が観賞されるようになつた、このようにモモは太古から日本人に親しまれてきた、観賞用のハナモモとして改良が行われたのは江戸時代に入ってからです、現在もハナモモの品種改良はあまり進んでおらず、栽培されている園芸品種は江戸時代に作出されたものが多くあります、果実は成りますが小さくて硬いので食ベルには適さない、香りハモモですので、毒性はありませんので、試しに食べてみてください。

＊花言葉＝気立ての良さ、恋の虜、恋の奴隷、あなたしか見えない。ハナモモの花言葉は恋の言葉です。

＊品種名の主なもの、・矢口＝ピンクの八重、・照手紅＝箒仕立て紅色大輪花、・照手白＝箒たちで、黄色かかった白色大輪花、・キクモモ＝細長い花弁が重なった様子がキクの花に見える。？源平＝紅白の花をつけるので

＊ハナモモは山野に自生しているものはありません、すべて人の手を介して植栽されたものです。